

小多利〈こたり〉の千両嘉兵衛〈せんりょうかへい〉（春日町）

嘉兵衛は、大阪の大火でうけた火傷〈やけど〉がようやくよくなり、初めて縁〈えん〉がわに生まれました。あたりは、すっかり目にしむような新緑につつまれていました。

それは、ちょうど三か月前の、享保〈きょうほう〉九年三月のことでした。大阪の町に火の手があがり、おりからの強風にあおられて、火はみるみるひろがり、大阪の町々をつぎつぎとなめつくしていきました。

ものすごい火の粉の下をくぐって、嘉兵衛が主家の家財を持出していた時のことです。

「嘉兵衛、嘉兵衛！この千両箱を頼むぞ、千両箱を!!。」煙の中で主人が叫びました。

「かしこまりました。」嘉兵衛は火をくぐって、千両箱をかつぎ出しました。

「きつと、お前にあずけたぞ。」「はい、身をもって、おあずかりいたします。」

嘉兵衛は、必死で安全な所まで千両箱をはこびましたが、火はつぎつぎに追っかけてきます。

「こりゃ、どこまで焼けるかわからぬ。安全な所といえば郷里の多利よりほかにない。」

火傷をうけた体でしたが、嘉兵衛は丹波、春日部多利まで、重い千両箱をかくし持って帰ってきました。多利についての嘉兵衛は気のゆるみと火傷のためそのまま寝こんでしまったのです。

体の調子〈ちょうし〉がようやくもとにもどった嘉兵衛は、「おあずかりした千両箱を、一日も早くご主人に、お返しして、安心していただかねば。」と、みんながとめるのも聞かず大阪にむかいました。

大阪へついて見ると、主家のあたりはもとより、町一面が焼の原となっていました。

八方手をつくしましたが、主人の行方はわかりません。やっと知人の久兵衛にめぐりあうことができました。しかし、「ご主人はその後、行方がわからず、たぶん焼死されたのだらうといううわさだ。」ということでした。

さらに、彼をおどろかせたのは、久兵衛の次のような話でした。いっしょに仕えていた同名の嘉兵衛が大火がおわってから奉行所に召出され、「その方は、千両箱を主人から預かったはずじゃ。それをどうした。」と詰問〈きつもん〉されました。しかし、身におぼえのない、もうひとりの嘉兵衛は、「さようなこと、おぼえがございません。」と、言いはりました。「何を申す、煙の中でたしかに、嘉兵衛、千両箱をたのんだぞ—という声を聞いた証人がいる。」とあって許してくれませんでした。その嘉兵衛は、日夜のごろ問にたえかねて、とうとう牢死〈ろうし〉してしまったという話でした。

嘉兵衛は、「わしが寝こまなかったら、こんなことにはならなかったのに。」と思うと、はらわたをちぎられる思いでした。嘉兵衛は、わけを話して千両箱を奉行所に差し出し、多利へかえってきました。そして、主人と牢死した友人のために、お堂を建て観音像〈かんのんぞう〉をまつりました。

その後、このお堂はなくなりましたが、その時の観音像は、今も、すぐ近くの市島町ざかいの柏野観音堂に移されてまつられています。

